

[道 徳]

「1 徳目 1 時間構成」による
モラルジレンマ授業の可能性に関する研究

安中 美香*

1 問題と目的

(1) 問題の所在

アメリカの発達心理学者ローレンス・コールバーグの道徳性発達論に依拠するモラルジレンマ授業は、日本の道徳教育にも多大な影響を与えた。特に荒木紀幸研究グループによる「兵庫教育大学方式モラルジレンマ授業」は、1980年代から1990年代にかけて、盛んに実践されてきた。しかし、コールバーグ理論と日本における道徳教育の考え方との相違により、教育行政機関によって積極的な後押しがなされなかったために、その注目度は低くなってきている。しかし、近年のいじめや不登校、学級崩壊などの問題が後を絶たない状況や青少年犯罪の増大、規範意識の低下などを受けて、中央教育審議会や文部科学省は、浅い読解的な指導や過度な教え込み、指導過程の形骸化を問題視するとともに、「創意工夫」ある授業を奨励しており、コールバーグ理論についても見直される良い機会であるといえる。

では、コールバーグのモラルジレンマ授業を、日本の道徳教育に沿ったスタイルで取り入れるためにはどうすればよいのだろうか。それは、1時間ごとのねらいが明確であり、短時間で容易に取り組むことができるような授業スタイルに改善を図ることである。

筆者は、「1 徳目 1 時間構成」によるモラルジレンマ授業の有効性の検証」という研究主題の下、2007年から2008年にかけて、道徳性の発達段階を上昇させることに有効であるとされている「コールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業」を「1 徳目 1 時間構成」という新たなスタイルによって「徳目主義的な道徳教育」に導入し、副読本を使用した従来型の授業スタイルとの比較により、その有効性を検証しようと試みた。結果、筆者作成の尺度による、事前・事後の量的分析で有意差は認められなかったものの、従来型の授業と同程度の効果があることや、「1 時間構成」の授業でも、クラスの半数以上の生徒が発達段階を上昇させていることなどから、徳目主義的な道徳教育への換用の可能性が示唆された。

そこで、本研究では、従来型の授業との比較ではなく、「2 時間構成」の方が効果が高いとされてきたスタンダードなモラルジレンマ授業と「1 時間構成」のモラルジレンマ授業を比較することにより、「1 時間構成」による授業の効果を検証し、その有効性を明らかにすることで、より指導要領の趣旨に添った授業スタイルを確立したい。

(2) 本研究の目的

本研究では、「2 時間構成」が基本とされ、かつ有効とされている兵庫教育大学方式モラルジレンマ授業と「1 時間構成」のモラルジレンマ授業を比較し、「1 時間構成」の授業の有効性を明らかにすることで、学習指導要領の枠内でも実施が容易なモラルジレンマ授業の新たなスタイルの確立を目指す。

2 研究仮説

本研究では、「コールバーグのモラルジレンマ授業」の理論をもとに、「1 徳目 1 時間構成」によるモラルジレンマ授業及び、「1 徳目 2 時間構成」によるモラルジレンマ授業の方法に依拠し、次のような仮説を立てて研究を進める。

「1 徳目 1 時間構成」によるモラルジレンマ授業の方が、「1 徳目 2 時間構成」によるモラルジレンマ授業よりも、道徳性の発達段階が上昇する。

* 柏崎市立南中学校

3 研究の方法

本研究は、公立中学校の2学年73名に対して、平成21年6月～7月に筆者が行った授業実践をもとに検証する。なお、「1徳目1時間構成」によるモラルジレンマ授業の実施クラスを実験群、「1徳目2時間構成」によるモラルジレンマ授業の実施クラスを統制群とし、どちらのクラスがより発達段階が上昇したかを分析し、仮説の検証を試みる。また、本研究で取り上げる徳目は生徒の実態から、①「生命尊重」②「家族愛」とし、実験群・統制群ともに、同一の読み物資料・理由づけ表を用いるが、指導過程を「1時間完結」と「2時間完結」で区別することとする。

4 実践の概要

(1) 徳目名とねらい（実験群・統制群ともに共通）

① 生命尊重：資料名「奥さんと子どものどっちを助ける？」（安中美香作）

ねらい・資料を読み、「生命を守ることにさまざまな形があることに気づき、主人公の葛藤状況を読み取り、主人公の行為について客観的に判断し、理由づけを行う。

- ・ディスカッションを通して、自分とは違う考え方に気づき、さまざまな視点で考え、生命についての道徳的な考え方を深め、それらをもとにして主体的に判断する。

② 家族愛：資料名「余命4ヶ月…告知するのかわからないのか」（安中美香作）

ねらい・資料を読み、「家族愛」にもさまざまな形があることに気づき、主人公の葛藤状況を読み取り、主人公の行為について客観的に判断し、理由づけを行う。

- ・ディスカッションを通して、自分とは違う考え方に気づき、さまざまな視点で考え、「家族愛」についての道徳的な考え方を深め、それらをもとにして主体的に判断する。

(2) 資料と理由づけ表について

表1に「生命尊重」の読み物資料、表2に発達段階を判断するための「理由づけ表」を示した。この理由づけ表は、コールバーグの道徳性発達段階に基づいて筆者が原案を作成し、道徳教育の実践に積極的に取り組んでいる8人の同僚の確認を経て確定した。（家族愛省略）ここで示した読み物資料により授業を進め、理由づけ表をもとに、生徒個々の発達段階を判断していった。

表1 「生命尊重」読み物資料

奥さんと子どものどっちを助ける？
2002年5月正三は大きな喜びの中にいた。結婚してから早6年…妻である奈智子のお腹に新たな命が宿ったのだ。
正三は、近所の子どもたちからも慕われているほど、面倒見がよく、とても子どもが大好きだった。奈智子も子どもは好きだったが、何よりも小さな頃から家庭環境に恵まれなかったので、子どもを囲んだ温かい家庭を夢見ていた。
しかし、奈智子は身体がとても弱かった。今でも何度か、子どもは無理かも知れないと医師から言われていたため、正三も奈智子も半ば諦めていた矢先の妊娠だった。案の定、医師からは、身体のことを一番に考えるのであれば、出産は諦めた方がいいと言われてしまったのだが、奈智子は、どうしても子どもを諦めることができず、正三にはこう言っていた。「先生からは出産を諦めた方がいいと言われたけど、どうしても自分の子どもを諦めることができないの。もし、妊娠中や出産の時に私の身に何かあっても、必ず子どもを助けてね。私たちの子どもを育ててあげてね。」と…。奈智子の意志はとても固かった。正三は、そんな奈智子の言葉を聞き少し複雑な気持ちになったが、子どもを産みたいという奈智子の気持ちを尊重し、出産を承諾した。
正三も奈智子も、生まれて来るわが子のことを思うと、嬉しくて仕方がなかった。正三は、身体が弱い奈智子に気遣い、積極的に家事も手伝い、奈智子の負担が少しでも軽くなるようにした。そのお陰もあり、特に問題もなく、順調に妊娠安定期（妊娠5ヶ月から）に突入していた。「ここまでくれば、後は元気な子が産まれてくるのを待つだけだ。」と二人は指折り数えて出産の日を待っていた。
妊娠9ヶ月目に入ったばかりの12月5日、奈智子は激しい腹痛に突然襲われ、救急車で病院へ運ばれた。医師の話によれば、陣痛が始まってしまったという。2ヶ月も早い早産である。突然のことで正三は動揺を隠せなかった。予定どおりの出産であれば、正三も立ち会うつもりでいたが、緊急の事態に、医師からは陣痛室の外で待つように言われた。何もしてやることのできない正三は、ただただ無事に子どもが生まれてくることだけを必死に祈っていた。どのくらい時間が経過したのだろうか。奈智子の苦しそうな声は途絶えることなく聞こえていたが、ある時、陣痛室から医師が出てきて正三の近くに歩みより、深刻そうな表情で言った。「奥さんの体力の消耗が著しく、このままでは奥さんも子どもも命が危険な状態です。残念ですが、奥さんと子どもの両方を助けることは厳しい状況です。奥さんと子どものどちらを助けますか？」
正三の頭は一瞬真っ白になり、何が起きているのかも理解できない程だった。そして、妊娠が発覚したばかりの時の「子どもを助けて、私たちの子どもを育てて」という奈智子の言葉が頭をよぎった。しかし、一呼吸おいてから静かに答えた。「妻を助けてくださいい…」と。
（実話をもとに作成）

表2 「生命尊重」理由づけ表

妻の命を助けるべき（正三に賛成）	生まれてくる子の命を助けるべき（正三に反対）
【段階1 他律的な道徳性】	
・妻の遺族に恨まれるから。	・子どもの命の方が将来が永いから。
【段階2 個人主義、道具的な道徳性】	
・男手一つで子どもを育てていく自信がない。 ・妻がいないと困るから。	・夫も子どもが大好きで、産まれてくるのを待ち望んでいたから。
【段階3 対人的規範の道徳性】	
・夫としては当たり前。	・子どもを助けた夫の気持ちを妻も分かってくれるだろう。
【段階4 社会システムの道徳性】	
・夫にとっては、どちらも大切な命であるが、これまで自分を支えてくれた妻の方を助ける義務がある。	・同じような状況で皆妻を助けたら、子孫の繁栄につながる。
【段階5 人情と社会福祉の道徳性】	
・奥さんさえ生きていれば、子どもはまた授かるかもしれないから。	・子どもを囲んだ温かい家庭が妻の夢だったのだから、その夢を叶える。
【段階6 普遍性、可逆性、指令性をもつ一般的な倫理原則の道徳性】	
・妻を愛しているから。	・一番愛している妻が、望んだことだから。

(3) 「1徳目1時間構成」による授業と「1徳目2時間構成」による授業の違い

表3 「1時間構成」の指導案

段階	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	◇指導上の留意点◆支援の重点
導入 3分	1 ウォーミングアップ	◆これまでにみなさんは命の尊さについて触れた経験がありますか？	◇心をリフレッシュさせる。 ◆本時の学習に興味・関心・意欲をもたせる。
展開 37分	2 資料の提示 ・資料の内容を理解する。	◆登場人物は誰ですか？ ・正三・奈智子 ◆正三は何を悩んでいるのですか？ ・奥さんと子どものどっちを助けるか。 ◆正三はなぜ悩んでいるのですか？ ・どちらも大切な命だから。 ・奈智子からの希望があるから。	◇モラルジレンマに直面させる。
	3 第1次判断 ・各自の判断とその理由をワークシートに記入。	◆正三の判断に賛成ですか？反対ですか？	◇ワークシートに主人公の判断に賛成か反対かとその理由を書かせる。 ◇黒板の自分が支持する方にネームプレートを貼る。
	4 自己と他者の考え方の相互の判断・吟味 (ディスカッション1)	◆あなたが正三だったらどうすべきだと思いますか？ 『奥さんを助ける』に賛成 ・奥さんを助ければ、また子どもが産めるかもしれない。 ・最愛の妻が亡くなるのは悲しすぎる。 『子どもを助ける』に賛成 ・奥さんの希望だから。 ・新たな命を助ければ、また未来に希望が持てるから。	◇生徒の意見を多く出せるようにする。
	5 自己と他者の考え方の相互の練り合わせ (ディスカッション2)	・奥さんの両親に恨まれない。 奥さんを助けたらどうなると思いますか ・奥さんが(亡くなっても)喜ぶ。 子どもを助けたらどうなると思いますか 正三が一人で子どもを育てるのは大変。	◆討議内容の焦点化を図る。 ◇小集団で話し合い、その後クラスみんなで意見を出し合う。 ◇どちらにもプラス面とマイナス面があることを押さえる。
終末 10分	6 第2次判断 ・主体的な価値の選択	◆今学級のみなさんのいろいろな意見やその理由を聞きましたが、最終的にどちらを支持するか考えてください。 『奥さんを助ける』に賛成 ・ ・ 『子どもを助ける』に賛成 ・ ・	◆道徳的葛藤の場面で正三はどうすべきかを再度判断し、自分の最も納得のいく理由づけを決定できるようにする。 (判断は同じでも違っていてもよい)
	7 まとめ	◆一言で「生命尊重」と言っても、いろいろなかたちがありますね。今日の授業を振り返っての感想を書いてください。	◆ワークシートにできるだけ詳しく記入させる。 ◆オープンエンドで終わる。

表4 「2時間構成」の指導案（第1次）

[illegible]

* 2 時間構成の第 2 次の細案については、1 時間構成の「学習活動 4」からの流れと同様のため省略。

表3に「1時間構成」の指導案、表4に「2時間構成」の指導案を示した。示したものは、「生命尊重」授業であるが、「家族愛」についても同様の流れで進めた。

① 「1 時間構成」の授業（実験群）

資料の読み取りから第1次判断・ディスカッション1・ディスカッション2・第2次判断までを1時間の中で行うものである。資料の内容については、登場人物や主人公が何に悩んでいるか程度の把握に止め、ディスカッション1とディスカッション2に多くの時間が費やせるようにした。

② 「2時間構成」の授業（統制群）

1 時間目は資料の内容把握から第1 次判断までとし、読み物資料について立ち止まり読みをしながら、じっくりと主人公の葛藤について理解できる流れとなっている。2 時間目は、ディスカッション1・ディスカッション2・第2 次判断と流れていくが、1 時間構成に比べると、それぞれの活動に費やすことができる時間が長い。

(4) 「1時間構成」と「2時間構成」の共通点

① 取り上げた徳目の理解を深めることがねらい

兵庫教育大学方式「モラルジレンマ授業」では、主人公に役割取得することがねらいとされているものが多いため、同じ判断をした者同士で話し合いをし、ディスカッションに流れていくスタイルが主流である。しかし、本研究では、取り上げた徳目について理解を深めることをねらいとしているため、どちらの判断をした場合でも考えられるプラス面とマイナス面について話し合い、ディスカッションに流れていくスタイルにした。そのため、話し合いの場面では、同じ判断をした者同士ではなく、両方の考えをもつ生徒が混在するように、通常のクラスの班で話し合いを進めた。

② 発達段階を上昇させるための手だて

第1次判断から第2次判断へ移行するときに、より発達段階を上昇させるための手だてとして、ディスカッション1における自己と他者の考え方の相互の批判・吟味において、段階1から段階6までの幅広い段階を取り上げるように心がけた。1時間構成の授業では、生徒が第1次判断をワークシートに記入している間の机間巡視により段階を把握し、授業者からの指名により、意見を発表してもらった。2時間構成の授業では、1時間目の終わりに一旦ワークシートを回収して、個々の段階を分析しておき、1時間構成の授業と同様に、授業者からの指名により意見を発表してもらった。

5 結果と考察

(1) 道徳性発達段階の変化（量的分析）

実験群・統制群それぞれの発達段階の変化は、表5のとおりである。これは、前出の表2に基づいて判断した結果である。実験群の「1徳目1時間構成」による授業の方が、統制群の「1徳目2時間構成」による授業よりも、発達段階を上昇させた生徒が多い結果となった。

表5 発達段階の変化の人数

		「生命尊重」授業	「家族愛」授業
実験群 (1時間構成)	上昇	16人	23人
	下降	2人	なし
統制群 (2時間構成)	上昇	14人	14人
	下降	3人	なし

(2) 道徳的な考え方の深まり（質的様相）

表6は、ワークシートに生徒が記入した授業の振り返り・感想の抜粋である。どちらのクラスにおいても、否定的な意見は一つも出されず、肯定的な意見ばかりであり、それぞれの徳目についての道徳的な考えが深まっている様子を感じ取ることができる。また、表6の抜粋からは、実験群クラスの方が、より道徳性が深まったと言い切れるものではないため、発達段階の上昇数と、道徳性の深まりとの関連性については言及を避ける。

表6 授業の振り返り・感想

	実験群クラス	統制群クラス
生命尊重授業	- 命は大切だということは、いつも言われていたけど、同じ「命と命の選択」という深いところまでは考えたことがなかったが、改めて命の大切さを痛感した。 - 命の重さに差なんてないけれど、その差がないからこそ、命の選択は最高に難しいと思った。 - 奥さんは、迷うことなく子どもを選んだということは、相当勇気がある人だと思った。「子どもを守る」は、こういうことなのかとも思った。 - 命はみんな平等であって、亡くなっていい命など、どこにもないと思った。 - 命を選ぶことは難しいし、生命が生まれることは、とても大変なことが分かった。 - このような場面に遭遇した時に、命の大切さを実感するのだと思う。 - 自分自身も周りの命も、大切にしようと思った。 - ものの善し悪しで決められるものではないと思った。	- 人の命は、みんな同じ重さだと思った。周りのどんな小さな命も大切にできる人になりたい。 - 命の大切さはみんな一緒に、亡くなってもいい命なんてないと思った。 - 人は生まれて亡くなるまでに子どもを作り、その子も大人になって子どもを作って亡くなつての繰り返し…生命尊重ってとても不思議な気持ちになった。 - 命の重さは全て同じだから、どちらかの命を選ぶというのはとても難しいと思った。 - 命の重みが分かった。 - 今ある命が大切だと思った。 - この授業を通して、命のことについて改めて考え直すことができた。 - どちらの命も大切だからこそ、選べないと思った。 - 命は儚いもので、きちんと大切にしていきたいと思った。
家族愛授業	- その人にとって何がベストの選択なのか、それを選択するにも、家族愛は重要であると思った。 - 家族ごとに告知するかしないかは変わってくると思った。しかし、どちらを選んでも、その家族にとって幸せであることが大切だと思った。 - 家族の大切さを改めて感じた。いつも身近にいるから「ありがとう」と言うのは照れくさかったりするけど、人はいつ亡くなってしまうか分からないので思ったことは、その時に言葉や行動に移したい。	- 告知するかしないかは、時と場合によると思う。 - 今まで家族のことを「うるさい」「めんどくさい」と思っていたが、「大切にしないといけない」と改めて思った。 - 自分だったら？という目線で考えた方が良かったと思った。 - 家族とは、秘密はなくて何でも言える、自分が素になれるものだったと思った。 - 自分だったら告知してほしくない。この授業を通して、自分は弱い人間だと思った。

・告知してくれるのも家族愛だと思った。 ・自分一人で生きている気になってしまいそうだが、深く考えると、家族が居てくれたこそ、今の自分があると思った。家族は、何にも代えられない唯一の存在だと思った。 ・家族は、いつも近くに居て、その大切さがあまり分からないけど、この授業をとおして、改めて大切なことが分かった。自分も、もっと家族を大切にしていきたい。 ・家族が大切だからこそ、家族の命について考え、それを知った人も苦しむのだと思った。 ・病と余命を告知することも、一つの愛だと思った。	・たとえ余命が短くても、考え方一つで変わってくるものだと思う。 ・一人で悩まずに、家族で相談して、どうしていくかを考えれば良いと思った。少しの可能性でも、やってみればできることもあると思った。 ・告知するのもしないのも、両方家族愛だと思う。どんな形であろうと、家族のことを思って行動することが大切なことだと思う。 ・相手のためを思うなら、何でも正直に考えた方が良い。
---	--

(3) 仮説の検証と考察

本研究では、日本の道德教育において、昨今指摘されているさまざまな問題を踏まえ、学習指導要領の枠内でも実施が容易なモラルジレンマ授業の新たなスタイルの確立を目指し、以下の仮説を立てて、その検証を試みた。

研究仮説

「1 徳目 1 時間構成」によるモラルジレンマ授業の方が、「1 徳目 2 時間構成」によるモラルジレンマ授業よりも、道德性の発達段階が上昇する。

兵庫教育大学方式モラルジレンマ授業に依拠した、自作の読み物資料・理由づけ表による、「1 徳目 1 時間構成」の授業と「1 徳目 2 時間構成」の授業を「道德性の発達段階の上昇」により比較した結果、1 時間構成による授業の方が、より道德性の発達段階が上昇することが確認され、仮説は支持された。

この結果は、「1 主題 2 時間」の方が効果が高いとされてきた兵庫教育大学方式モラルジレンマ授業よりも、「1 時間構成」の方がより効果的であるということを意味する。しかし、2つの徳目を取り上げる授業の比較のみで、そのように断定するには、まだデータが足りないとの批判もあるかもしれない。けれども、少なくとも「1 時間構成」でも、その効果は十分に期待できるということであり、指導要領の枠内で実施することを考えれば、「1 時間構成」でも効果が上がるということが明らかにされたということには、大きな意味があるといえよう。

6 今後の課題

(1) 分析方法と指導計画

本研究においては、学習指導要領の枠内でも実施が容易なモラルジレンマの授業スタイルの確立を目指し、コールバーグ理論に依拠した、道德性の発達段階の上昇により「1 徳目 1 時間構成」によるモラルジレンマ授業の有効性を検証した。しかし、「道德性の発達段階」が上昇することと、指導要領における「道德性を養う」こととの関連性は明らかにされていないため、道德性の発達段階が上昇したことだけで、道德性が養われたとは言い切れない。日本における「徳目主義的道德教育」への、より確かな有効性を明らかにするためには、標準化され市販されている「道德性尺度」により、その効果を測ることが望ましい。そして、それらの尺度において道德性が上昇したことが確認されれば、さらに、授業効果の信頼性も高いといえるであろう。だが、標準化されている尺度は、指導要領の内容項目を全て網羅しているものであり、一つの手法を用いた数時間ばかりの授業実践において、それらの尺度で効果を測ることは非常に難しいともいえる。数値的な推移で授業効果を測るのであれば、長期間の実践が必要となるだろう。さらに、教師は、量的な推移だけに留まることなく、質的な変容を詳細に看取りながら、その効果を確かめられるような資質も必要とされているといえる。さまざまな徳目（内容項目）を関連させながら、長期間を見越しての指導計画を作成し、決して単発の授業にならないように工夫することも大切である。

今後は、本研究で扱った2つの徳目以外の徳目についても実践を行い、より効果の上がる徳目を見極めていくことも必要であるし、1つの手法を用いて長期間の実践を行うことが困難な現実からすると、各徳目ごとでも道德性の高まりや深まりを測ることができるよう信頼性の高い尺度の検討をしていくことも必要である。

(2) 道德教育の再生に向けて

「道德の時間は答えが決まっていつまらない」と児童・生徒から言われるような授業では、道德性が養われるわ

けがなく、児童・生徒が道德の時間は楽しいと感じられるような授業を構築し、それを継続してこそ「道德性を養う」ことにつながっていくのであろう。しかし、現場の教師は多忙を極めていることは事実であり、教材研究やさまざまな校務分掌・さらには行事に追われ、気持ちはあっても、道德教育へは手が回らない場合も多いであろう。今後は、それらを解消する手段として、新学習指導要領において位置づけられた各校における「道德教育推進教師」が中心となり、さまざまな手法を組み合わせた年間指導計画の作成を行い、児童・生徒も教師も意欲的に臨めるような手立てを講じることが求められる。本研究で取り上げた「1徳目1時間構成」のモラルジレンマ授業も、そうした手立ての一つとして役立つことを期待している。

引用・参考文献

- ・荒木紀幸・八重柏新治・前田和利 1985 「「規範－基本判断」判定法を用いた道德性の測定」『兵庫教育大学研究紀要』第一分冊vol. 6
- ・荒木紀幸・野口裕展 1986 「中学生を対象としたモラルジレンマ教材と道德の授業モデル」『兵庫教育大学研究紀要』第一分冊Vol. 7
- ・荒木紀幸 1988 『道德教育はこうすればおもしろい』 北大路書房
- ・荒木紀幸 1991 『ジレンマ資料による道德授業改革 ～コールバーグ理論からの提案～』 明治図書
- ・荒木紀幸 1992 『モラルジレンマ資料と授業展開 中学校編』 明治図書
- ・荒木紀幸 1997 『続 道德教育はこうすればおもしろい』 北大路書房
- ・荒木紀幸 2005 『モラルジレンマによる討論の授業 中学校編』 明治図書
- ・荒木紀幸 2007 『モラルジレンマ資料と授業展開 中学校編 第2集』 明治図書 『教育学研究紀要』 第49巻
- ・安中美香 2008 「1徳目1時間構成」によるモラルジレンマ授業の有効性の検証 『上越教育大学大学院修士論文』（未公刊）
- ・糊澤 実・中田光彦・荒木紀幸 2000 「中学校用モラルジレンマ資料作成に関わる基礎的研究」『日本教材学会年報』 Vol.11
- ・Kohlberg, L. 1987 『道德性の発達と道德教育』 広池学園出版部
- ・中央教育審議会2008 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- ・永田繁雄 2008 「道德授業の現状分析と今後の動向」 日本道德教育学会 基調講演補充資料